

台湾で書いてみた生活史

倉 本 知 明* 菊 地 暁**（編）

許 譽璇・許 書庭・張 蕓挺・賀 鈺煊・黃 琪雅・陳 珮蓁
林 映彤・侯 宜涵・黃 馥漢・何 宜娣・王 嘉穎（著）

序・台湾で書いてみた生活史

倉本知明

①白米を番薯籤と交換できるなんて、私たちって恵まれていたわよね。

聞き手・書き手＝許譽璇

②何が起こっているのか全然わからなかったけど、その時はカーキ色の軍服を着た兵士を見たら、すぐに隠れないといけないうって言われて、すごく怖かった。

聞き手・書き手＝許書庭

③父さんは、日本人が持って帰ったに違いないって。

聞き手・書き手＝張蕓挺

④過去は変えられず、ただそれを記録し、忘れずに歩み続けるしかない。

聞き手・書き手＝賀鈺煊

⑤若いうちにいろいろな経験をしてほしい。

聞き手・書き手＝黃琪雅

⑥人生は確かに辛いことばかりだったけど、それでも幸せだったよ。

聞き手・書き手＝陳珮蓁

⑦「ちゃんと勉強しなきゃいけない！」

聞き手・書き手＝林映彤

*くらもと ともあき 文藻外語大学

**きくち あきら 京都大学人文科学研究所

- ⑧母ちゃんは、「あんたのお父ちゃんがそこにいるよ。きっと私を連れに来たんだ」って言ったけど、私には誰の姿も見えなかった。

聞き手・書き手＝侯宜涵

- ⑨見習いの立場ってのはな、ほんとうに弱いもんだったよ。飯と寝床はあっても、給料なんてほとんどなかった。

聞き手・書き手＝黄馥漢

- ⑩任勞任怨（苦勞をいとわず）

聞き手・書き手＝何宜娣

- ⑪つらい時こそ、天主に祈って、助けを求めなさい。

聞き手・書き手＝王嘉穎

跋・台湾で書いてみた生活史

菊地暁

序・台湾で書いてみた生活史

倉本 知明

はじめに

本稿に収録されている生活史は、台湾の高雄市にある文藻外語大学日本語学科二技部（日本の短期大学3、4年生に相当）の学生たちが2025年度に履修した「専業日文閲読与写作（専門日本語リーディングとライティング）」の課題レポート「おじいさん、おばあさんの生活史」から優秀な作品11篇を選出したものである。課題レポートは菊地暁編著『書いてみた生活史 学生とつくる民俗学』を参考に作成法を述べた上でインタビューを行わせ、それらを2000字程度の日本語に訳して作成してもらった。履修者は21名、ほとんどの学生は五專（日本の高等専門学校に相当）で日本語を専攻してきたために、読み書きに関してはすでに一定のレベルに達していたが、それでも文法上の間違いなどに関しては文章の意味が変わらない程度に、倉本によって修正を行い、日本語読者には分かりにくい固有名詞や歴史的事象などについても簡単な説明を付け加えた。その意味で、本稿に掲載された生活史には翻訳と校閲という新たな解釈が加わっていることをここに記しておきたい。

台湾人学生たちによる生活史記述の試み

今回生活史を書いてもらった学生たちの祖父母の年齢はおよそ60歳代後半から90歳代と幅広くあったが、日本統治期後半から戦後初期にかけて生まれた者が大半であった。彼らが青春時

代を過ごした1960年代から1970年代は、台湾がアジア四小龍へと飛躍していく高度経済成長期であると同時に、若林正文が指摘するところの「遷占者国家」であった戦後台湾社会が、1971年の中華民国の国連脱退やその翌年におけるニクソン訪中とそれに続く日華断交などによって、急速に国際的な孤立を深めていった時代でもあった〔若林 2008〕。

彼らはひと世代前の日本語世代が直面したような「国語」転換による言語的混乱を体験することは少なかったが、それでも①許譽璇や②許書庭の生活史に見るように、母語への抑圧はその記憶に深く刻み込まれていた。戦後公用語としての日本語の使用が禁止された台湾では、1951年から方言による教学も禁止され、1956年からは台湾省政府によって「国語を話そう運動」がスタート、校内で台湾語や客家語、原住民諸言語などを使用した児童に罰則を与える規則などが作られていった〔菅野 2003〕。その結果、多くの家庭で③張雲庭の生活史に描かれたような家庭内における言語的不一致が生まれていった。

翻って、外省人の視点から台湾の戦後史を見たのが④賀鈺煊の生活史で、そこでは国民党軍とともに渡台したディアスポラとしての祖父の人生が描かれている。1987年に戒厳令が解除されると、それまで禁止されていた兩岸探親（大陸に残してきた家族との交流）が許されるようになるが、多くの外省人老兵たちは40年近い歳月を経た故郷に自らの居場所を見いだせず、結局異郷であった台湾に骨を埋めることになった。賀の祖父が警察官として台湾民主化の重要なターニングポイントとなった美麗島事件にかかわっていたことも、一個人の生活史と歴史の奔流がふとしたきっかけで混じりあうようで興味深い。

戦後台湾におけるオーラル・ヒストリーの聞き取り調査は、中央研究院や国史館、国防部史政編訳局といった公的機関によって行われてきたが、当初は外省籍の軍人や政治家、党関係者を対象とすることが多く、エリート・オーラルとしての性格を色濃く有していた〔李 2013〕。戒厳令が解除されてからは調査の主体も多様化し、その対象が台湾籍日本兵や白色テロ犠牲者、海外台湾独立運動関係者など、植民地期を経験した本省人や戒厳令期に政治犯とされた人々にまで広げられていった¹⁾。賀の生活史に見られるような非エリート層の外省人老兵の経験談についても、国防部や国史館、さらには眷村と呼ばれる外省籍の軍人やその家族らが暮らした官営コミュニティの多かった地方自治体によって、多くの口述歴史書が刊行されていった²⁾。

今回集まった学生たちの生活史からは、個人の生活史が常に産業構造の変化と密接な関わりを持っていることが窺える。1949年から1953年にかけて、国民党政府は旧日本資産を補償財源としながら一連の農地改革を行ったが、こうした農産業はすでに日本統治期にその基盤が築かれているケースが多かった。例えば、⑤黃琪雅の生活史に描かれた高雄市旗山区のパナナや、⑦林映彤の生活史に描かれた高雄市大樹区にある九曲堂のパイナップル缶詰などは、戦前日本内地にまで輸出された主要な農産品でもあった。また、戦後の台湾では「米援」と呼ばれる年間一億ドルにもものぼる経済援助資金がアメリカから流れ込んでいたが、冷戦体制下におけるこ

の莫大な経済援助は台湾国内の産業構造を大きく変化させることになった。例えば、⑧侯宜涵の生活史では貧しさのために妹をアメリカ人の養子に出した祖母が台南の塩埕里にある紡績工場に働きに出たとあるが、戦後急速に発展した台湾の紡績業もまた、この「米援」による原綿無償供与の恩恵をあずかった産業のひとつであった〔戴 1966〕。

1960年代後半、国民党政府はこうした戦後農業の復興と「米援」を梃子に、国内の経済構造を従来の農業中心から労働集約型製品の輸出拡大へと舵をきっていく。15年間続いた「米援」が終了した1966年、高雄に世界初となる保税制度と工業団地の機能を合わせもった輸出加工区を設置したのだ。当時の高雄市は台湾の経済構造転換の中心地で、全国各地の農村から大量の余剰労働力を吸収しながら急速にその人口を増加させていった。この時期に輸出加工区に集まった労働者の多くは、⑦林映彤や⑩何宜娣の生活史に見るように、中学を卒業したばかりの女工たちを中心であった。彼女たちは高校や大学に進学する兄弟たちの学費を稼ぐために働きに出されることが多かったが、1968年における高雄市前鎮区における輸出加工区では、従業員11824人のうち10119人が女工であったとされる〔洪 1968〕。1973年には、高雄市旗津区から前鎮区にある輸出加工区に向かう連絡船が、25名の女工らを乗せたまま沈没して全員が溺死するという痛ましい事件も起こったが、台湾の高度経済成長はこうしたウーマンズパワーの犠牲の上に成り立っていたのであった³⁾。

就学や就労といった日常生活だけでなく、生活史にはしばしば災害といった非日常の記憶も登場する。⑪王嘉穎の生活史に見るように、当時の台湾は社会インフラが非常に脆弱で、大型台風などによって大きな被害を受けることがままあった。1977年に起こった台風4号（テルマ台風）は台湾南部を直撃し、37人の死者と12人の行方不明者、298人の負傷者を出したとされる。自然災害に関する記憶については、中央研究院台湾史研究所が1999年に起こった921地震のオーラル・ヒストリーを収集してその成果を刊行しているが、自然災害の記憶は台湾におけるオーラル・ヒストリーの一ジャンルをなしている⁴⁾。

なお、王の生活史に出てくるローズ教会とはスペインのドミニコ会が1859年に建立した玫瑰聖母聖殿主教座堂のことで、プロテスタントが強い台湾において同教会は現在までカトリック信者たちの心の拠り所となっている。王の生活史には高祖母の代からカトリックを信仰していたと書かれているが、キリスト教の布教が解禁された清朝統治期にはすでにカトリック信者であったものと思われる。王の祖母が毎週末通っていた聖堂正面にあるアーチ門の要石の上部に掲げられた「奉旨」の石碑は、当時欽差大臣であった沈葆楨による揮毫と伝わる。こうした個々人の信仰もまた、大文字の「歴史」と自己がふとしたところで繋がっていることに気付く契機となり得るのかもしれない。

まとめに

今回生活史を執筆させる過程において、多くの気づきや驚きがあった。まず、今回の課題レポートはあくまで日本語教育の枠組みの中で行ったものであるが、AI 翻訳が横行する外国語教育の現場において、家族への聞き取り調査に基づいた生活史の作成はいまだ AI に答えを求められない語学学習の形があることを気付かせてくれた。生活史の作成はともすれば一方通行的になりやすい語学学習の教師／学生といった関係性を双方向的な学びの場へと変え、学生たちには観察、記述を基礎とする人文リテラシーの訓練を課す結果となった。

驚いた点としては、今回生活史を書いてもらった学生たちの多くが、祖父母が自由に母語を話せなかった時代を過ごしたことを嘆じながらも、彼ら自身はその「母語」を十分に話すことができずにいたことだった。台湾では 1993 年に各地の小学校で郷土言語の選択科目が設置され、2001 年からは台湾語、客家語、原住民言語のクラスが正規科目として導入されたが、むしろ母語学習が奨励される現在の方が「母語」喪失の危機は大きいようだった。また今回は履修者の大半が女性であったために、生活史も自ずと女性たちの物語が中心となってしまったが、そのことははからずも「台湾の奇跡」と呼ばれた高度経済成長期におけるウーマンズパワーの重要性を再確認することになった。しかし一方で、今回の履修者の中には留学生や原住民籍の学生、また現在急増している東南アジア出身の両親を持つ学生がいなかったために、都市／山地、あるいは台湾／東南アジアといった空間的な多様性は限られている印象があった。

歴史的にオーラル・ヒストリーが盛んな台湾において、Life History は「生活史」ではなく「生命史」と訳されてきたが、そこからは日々の営みよりも個々人の人生を語らせることでその名誉を回復しようとしてきた戦後台湾のオーラル・ヒストリーの歴史が色濃く影響している⁵⁾。学生たちの書いた生活史は、まさに無数の生命の累積であるとともに、激動の戦後台湾史の変遷を個人の側から見返した記録でもあった。まだ端緒についたばかりの「台湾で書いてみた生活史」であるが、今後も日本語教育の一環として継続していきたい。

注

- 1) 長らく公的機関が主導する形で進められてきた台湾のオーラル・ヒストリーは、その発足時においてはエリート・オーラル的な性格が強かったが、1984 年に中央研究院近代史研究所で口述歴史組が成立すると、その対象は外省人のエリート層だけに止まらず、企業人士や芸術家、医療関係者や科学者など本省人にまで拡大された。1988 年には、台湾省文献委員会（現在の国史館台湾文献館）が従来社会的タブーとされてきた 228 事件に関する口述歴史の記録を刊行するなど、1990 年代における台湾の口述歴史ブームの火付け役となった。1986 年に成立した中央研究院台湾史研究所でも同じくオーラル・ヒストリーが重視され、同所には 1994 年に口述歴史室が設置された。当初は台湾籍日本兵の体験を記録することがその目的とされたが、後に白色テロの犠牲

者や原住民族、災害被災者など、従来の中華民国史観の中では声を上げられなかった人々の体験を記録していった。

- 2) 2000年代前後、眷村が点在していた地方自治体では専門家らによる聞き取り調査が行われてきたが、その成果は、林樹『新竹市眷村田野踏査報告書：竹籬笆の春天』[新竹市文化中心 1997]、何思暉『台北県眷村調査研究』[新北市文化局 2001]、桃園県文化局編『竹籬笆の記憶与保存——眷村文化之抢救与保留』[桃園県政府文化局 2007]、張耀升『告別の年代：再見！左營眷村！』[高雄市政府文化局 2011]として出版されている。
- 3) 呂淳鈺の指摘によれば、輸出加工区などで働く女工たちは「台湾経済のめざましい発展を支える無名の英雄」でもあったが、彼らが労働集約型産業で絶対的な労働力となった背景には、女性の賃金が日本の植民地時代から抑えられていたことに加え、ストライキや暴力行為も少ない理由などから経営者たちに好まれたからだとされる。台湾女性史入門編集委員会編『台湾女性史入門』[人文書院 2008]。
- 4) 921地震に関するオーラル・ヒストリーに関しては、許雪姬、詹素娟主編『災後十年：九二一地震口述訪問記録歴史』[中央研究所台湾史研究所 2012]などがある。また2009年に起こった台風8号（モーラコット台風）の被害被災者へのオーラル・ヒストリーに関しては、鄭水萍研究団隊『小林村災後口述歴史訪査計画報告書』[国立台湾博物館 2010]や、中央研究院近代史研究所の陳儀深による『八八水災口述史：2009-2010 災後重建訪問記録』[前衛 2011]などの成果がある。
- 5) 台湾口述歴史学会理事長も務めた許雪姬は、台湾におけるオーラル・ヒストリーが歴史的にみて社会的強者や男性、漢人などマジョリティによっていたことを踏まえた上で、それらが外省籍の軍人や政治家らの個人的経験から民国初期における中国の近現代史を明らかにできた点、植民地政府が残した公的記録ではない本省人の生活経験を知ることができた点、228事件や白色テロなど政治犯とされた人々の冤罪を晴らす積極的効用があった点などを述べている [李編 2013]。

文献

- 菊地暁編著 2024 『書いてみた生活史 学生とつくる民俗学』実生社
- 許雪姬主編 2014 『台湾口述歴史学的理論実務与案例』台湾歴史口述学会
- 菅野敦志 2003 「中華文化復興運動と『方言』問題（1966-76年）」『日本台湾学会報』第5号
- 戴国輝 1966 「台湾の経済開発とアメリカの援助」『アジア経済』アジア経済研究所
- 洪瑞国 1966 「女工与童工の就業及其保護立法」『高雄加工出口区簡訊』（第3集第7巻第5期）經濟部加工出口区管理处
- 台湾女性史入門編集委員会編 2008 『台湾女性史入門』人文書院
- 李向玉主編 2013 『衆声平等：華人社会口述歴史的理論与実務』澳門理工学院
- 若林正丈 2008 『台湾の政治 中華民国台湾の戦後史』東京大学出版会

①白米を番薯籤と交換できるなんて、私たちって恵まれていたわよね。

聞き手・書き手＝許譽璇

語り手＝祖母／高雄市橋頭果物屋娘／セメント工場の職員妻／高雄市梓官在住

民国 39（1950）年、碧雲は高雄の橋頭にある甲圀という小さな集落で生まれた。家には祖父母、両親のほか、兄弟姉妹が 6 人（兄弟 3 人、姉妹 3 人）いた。碧雲は五番目の子供で、上には 2 人の兄と 2 人の姉がいた。両親は果物屋を営んでいたため、碧雲も暇なときには店の手伝いをする必要があった。

幼いころ、彼女は村の廟で歌仔戲（台湾オペラと呼ばれる舞台劇）を見るのが大好きだった。それが子供時代の最も印象的な思い出という。また、幼いころの一番の楽しみは友達と一緒に果物を盗んで食べることだった。「家の果物は売り物だから、他の人の果物を盗んで食べたのよ」と彼女は笑いながら話した。

碧雲が生まれる前年、国民政府が台湾にやってきた。そのために、彼女が小学校に通っていたころはちょうど「国語（中国語）推奨運動」の時期だった。「当時学校では国語を話さないといけなくて、台湾語を話しているのが見つかり、一角の罰金を取られたんだ。一角あればたくさんの物が買えたんだから」と彼女は振り返る。私が「罰を受けたことがあるか」と尋ねると、碧雲は笑いながら「当たり前でしょ？ 私は台湾人なんだから！」と答えた。

小学校時代の話になると、碧雲の話が次々とあふれ出した。毎日 40 分も歩いて学校まで通っていたが、その道中での遊びが一番楽しかったという。道端には収穫された後のサトウキビが落ちていて、それを拾って食べるのが楽しみだった。当時は生活用品が高価で靴を履くのももったいなく、靴ひもを結んで肩にかけて裸足で学校に通っていた。「だけど私は運が良かった方よ。サンダルを持っていたんだから」と彼女は回想する。

碧雲には義理の兄がいて、その人は軍の慰問団で歌や楽器の演奏をしていた。彼が台北に行く度に靴やカバンなどの生活用品を買ってきてくれた。「同級生たちにすごく羨ましがられたんだから」と碧雲は誇らしげに話した。

また、碧雲の母親は海軍基地で売店を営んでいた。そのおかげで、物資が不足して白米が贅沢品だった時代でも、軍で配給された食事を食べることができた。「白米が食べられて幸運だった」と彼女は語る。当時の子供たちは基本的に番薯籤（サツマイモの乾燥チップ）しか食べるものがなかった。ところが、白米ばかり食べていると飽きてしまうために、近所の人と番薯籤を交換して食べることもあった。「白米を番薯籤と交換できるなんて、私たちって恵まれていたわよね」と彼女は笑った。

小学校を卒業した後、碧雲は中学校の商業科に進学したが、家から学校まで電車で通うのが

大変だったためにすぐ退学を決意した。その後、兄の紹介で橋頭農会の幼稚園教師として働き始めたが、子供たちがいつも汚れていたために、その仕事を辞めて家業の果物店を手伝うことになった。両親が牛を飼っていたために、時々牛乳を高雄の牧場へ届ける仕事もしていた。「義美（台湾の有名お菓子メーカー）のミルクキャンディにはうちの牛乳が使われたこともあるのよ！」と誇らしげに話す。

その頃、碧雲は友人の紹介で夫（私の祖父）と知り合い、結婚して橋頭近くの梓官という村に嫁いだ。夫と一緒にセメント工事の仕事をしながら、娘1人と2人の息子を育てた。彼女は60歳を過ぎるまでセメント工事の仕事を続けたが、長年の労働の影響から現在は腰や背中が痛く、重い物を持つことができない。「今住んでいる家は自分たちで建てたのよ。今じゃこんな大きな家は買えないわね。」と彼女は語る。

また、夫と共に養豚業にも手を出し、3000頭以上の豚を飼育した。ところがそのころ台湾全土で口蹄疫が大流行し、豚を売ることができなくなってしまった。「病気にかかった豚を持つ農家には補助金が出たのに、なぜかうちの豚は感染しなかった。だから売ることでもできず、補助も受けられなかった」と彼女は嘆く。「もうどうしようもなく、豚をわざと感染させようとまでしたのよ。でもどんなに頑張ってもうちの豚は全然感染しなかったっけ」と苦笑いした。

そのころは誰もが豚肉を食べるのを恐れて、市場には買い手がいなかった。「豚をトラックに載せて出荷しても売れずに、そのまま戻ってくる。そんなことが何度も続いたっけ」。豚を売るためにあらゆる手を尽くしたが、結局ほとんど利益にならず、大きな損失を出してしまった。「最後はもうどうしようもなく、すごく安い値段で売るしかなかったの」と彼女は悲しげに語る。「あの時は本当に豚を飼えば飼うほど赤字になった。養豚業で大損した」。当時、長男（私の父）は馬祖の離島で兵役についていて、家計は非常に厳しかった。彼女は「お金がなくて食べるものもなかった。あの時は本当に痩せ細ってしまったわ」と語る。そんな時、嫁いだ娘が生活費を援助してくれたという。

現在は3人の子供たちはそれぞれの道を歩んでいる。娘は商業科を卒業し、農協で働いている。長男は農場経営を学び、その後食肉市場で働くことになった。次男は兵役を終えた後、自分の進路が決まらずに滷肉飯の店を開くことを決意、今ではその店も成功している。現在碧雲は子供たちの家の隣で暮らし、日々近所の人とおしゃべりを楽しんだり、孫たちのために食事を作ったりしている。「孫たちが元気に育ってくれば、それだけで私は幸せよ」と語る。

②何が起こっているのか全然わからなかったけど、その時はカーキ色の軍服を着た兵士を見たら、すぐに隠れないといけないって言われて、すごく怖かった。

聞き手・書き手＝許書庭

語り手＝祖父／嘉義県東石郷農家の息子／会社員／高雄市鳳山区在住

永吉は民国 30（1941）年、嘉義県東石郷の農家に生まれた。永吉の父方の祖父母、父母、兄弟 8 人（全て男の子）の 12 人家族であった。永吉は 8 兄弟の中で上から 5 番目の五男、家は主に農業を営んでいて、当時の農家にとっては子どもが多いほどいいから、両親は男の子を 8 人産んだ。現代から見ると本当に奇跡と言える。

東石郷は嘉義県に位置していて、東は六脚郷と朴子市に接し、西は台湾海峡に面している海沿いの町だ。地元の住民は主に農業と漁業を営んでいて、特に牡蠣の養殖業がとても盛んだ。現代に至るまで、東石郷は台湾でも有名な新鮮な牡蠣の産地として知られている。永吉はそんな地域と家庭環境の中で育った。

永吉が生まれたのは日本統治時代、第二次世界大戦のさなかで、当時は周りの年長者たちがよく日本語で会話していた。しかし彼はまだ幼くて、しかも 4 歳のときに日本政府が撤退したために日本語は話せなかった。家では主に台湾語で会話していたが、10 歳年上の長兄は日本の教育を受けていたので、日本語を話すことができた。

「そのころ、俺はまだ小さかったけど、アメリカ軍の飛行機が空襲に来たのをよく覚えているよ。家族みんなで防空壕の奥に避難していたんだ。幸い家族にけが人はいなかったけど」。

民国 34（1945）年、日本が戦争に敗れて台湾から撤退した。その後、台湾は国民政府の統治下に入り、「光復」と呼ばれるようになった。その年、永吉は 4 歳だった。中華民国政府は中国民族主義運動と国語（中国語）推進運動を実施し、当時台湾にいた人々は日本人ではなく中国人であるのだと強調した。「そのとき俺はまだ 4 歳だったから、自分が日本人だという意識はなかった。」

民国 37 年（1948）、七歳になった永吉は国民政府が設置した国民学校に通い始めた。国民学校とは現在でいう小学校のことだ。当時、国民政府は国語運動を推進しており、現代と同じように永吉も 1 年生から注音符号の「ㄅㄆㄇㄉ」を学び始めた。最初の国語の教科書はとても簡単な内容だった。

「來來來，來上學。去去去，去讀書（おいでおいで、お勉強に行こう。さあさあ、本を読もう。）」

「たったこれだけの 12 文字が教科書の本文だなんて……」祖母と顔を見合わせて微笑んだ。

国語のほかにも、当時の国民学校では数学、歴史、公民などの科目を学んでいた。歴史の授業で教えられていたのが中国史で、台湾の歴史ではなかった。台湾の歴史が国民教育に取り入

れられるようになったのは、戒厳令が解除されて民進党が政権を取ってからのことだったが、それはまだずっと後の話である。

毎日放課後に帰宅する前には教室の掃除を行い、その後全員が一斉に歌って別れのあいさつをした。

「功課完畢要回家去，大家明天會，明天會（宿題も終わったし、家に帰ろう。みんなまた明日、また明日）」。

当時、学校ではしばしばカーキ色の軍服を着た人たちが校内を歩いているのを見かけた。それは日本政府の撤退後に国民政府と中国から台湾に来た兵士たちで、台湾国内の軍事基地では多くの兵士を収容できなかったために、たくさんの兵士が国民学校の校内に暮らしていた。台湾は白色テロ時代の真っ只中で、情報が発達していない時代背景もあって、特に一般の人々は白色テロ時代に何が起こったのか全く知らずにいた。家の年よりたちはカーキ色の軍服を着た兵士を見たらすぐに隠れるようにと言っていた。そうしないと、捕まってしまう可能性があるからだ。永吉は捕まった人たちがなぜ逮捕されなければならなかったのかわからなかった。

「何が起きているのか全然わからなかったけど、その時はカーキ色の軍服を着た兵士を見たら、すぐに隠れないといけないうて言われてすごく怖かった。」

永吉が高校を卒業して高雄市左営区で3年間海軍軍人として勤務した後、台湾プラスチックグループの南亜プラスチック会社（高雄市仁武区）に就職した。そこで数年間懸命に働いたある日、同じく南亜プラスチック会社で働いていた長兄の永和が、ある女性を紹介したいと言った。その女性こそが私の祖母である碧美だった。

実は永和と碧美の長兄、信茂はとても仲の良い友人で、ある時永和が「弟がまだ結婚していないのだが、性格も優しく誠実だ」と話し、信茂の一番下の妹もまだ結婚していないことを聞いた。そこで、2人を紹介することにしたのだ。碧美は当時故郷の朴子鎮（現在の嘉義県朴子市）で仕立ての仕事をしていた。朴子鎮はちょうど永吉の故郷、東石郷の隣町だったため、永吉は高雄から帰郷して碧美と会うことにした。

その後、2人は永吉が嘉義に帰るたびに会うようになり、1年ほどの交際を経て結婚を決めた。永吉は28歳、碧美は24歳で、当時の時代背景から見れば少し遅い結婚だったと言える。

結婚後、碧美と永吉は高雄で生活を始めた。最初は高雄の草衙で暮らし、そこで、おば、おじ、そして年齢が一番下の父親が生まれた。永吉は退職するまで南亜プラスチック会社で働き続け、その仕事は非常に安定したものだった。碧美は家計を支えるために五塊厝に移った後、自宅で靴を売る事業を始めた。後に鳳山に移ると、商売はうまくいかず、店をたたんだ。現在も2人は鳳山に住み続けている。

大学を卒業した娘は新聞記者として働き始めた、当時記者になることはとても輝かしいことだったと言っている。その後、アメリカで薬剤師として働く夫と結婚し、現在はアメリカで主

婦として生活している。長男は大工で、勉強は得意ではなかったが、芸術の分野では自分の才能を発揮し、今では手作りの作品を作り上げるアーティストとなっている。一番下の息子、つまり私の父親は、永吉と同じように安定した仕事を持っている。

「安定した仕事と幸せな家庭を持つと、何かを変えたいと思うことはなくなるんだよ」と永吉は言った。

③父さんは、日本人が持って帰ったに違いないって。

聞き手・書き手＝張雲挺

語り手＝祖父／屏東県恒春鎮南湾里の民宿業者

敏忠は民国 39（1950）年に屏東県恒春鎮の南湾里で生まれた。長男で妹が 2 人いる。祖父は地元で有名な大地主で、家はとても裕福だった。父は遠洋漁業の仕事をしていて、世界中を船で旅して日本のディズニーランドにも行ったことがあった。そのときに「イツ・ア・スモールワールド」の前で記念写真を撮り、その写真はいまでも家の壁に飾ってある。母は信心の強い仏教徒で、専業主婦だった。妹たちとも仲が良く、敏忠は幸せな子ども時代を過ごした。

当時の恒春は古城に囲まれた下町以外はほとんどが何もない田舎で、観光地としてはまだ発展していなかった。夜になると明かりが少なく、空には星がたくさん見えた。南湾ビーチは地元の人しかいない場所で、敏忠はよくそこで水遊びをした。近くには海鮮レストランが並び、当時の後壁湖は目立たない小さな港であった。

台湾が経済成長をしていたころ、地元の人たちは昔の日本軍が残した宝物の話をよくしていた。たとえば、日本軍が後山に穴を掘って宝を隠したとか、敗戦後に持ち帰れなかったために今でもその山に宝物があるといったうわさがあった。そのうちのひとつが「夜明珠」の話だった。

国立海洋生物博物館へ行く道のそばに海岸線があって大きな岩がある。地元の人たちはその岩の中に夜明珠があったと信じていた。その不思議な珠は夜になると光っていたが、ある日突然なくなってしまった。多くの人は「オランダ人が持って行った」と思っていたが、敏忠の父はそう思わなかった。「父さんは、日本人が持って帰ったに違いないって」と、敏忠は言った。

敏忠は勉強が得意で、家も裕福だったので大学に進学した。卒業後は中小企業銀行に就職し、お見合いでマリンスポーツ業者の家から来た張足仔と結婚した。恒春に引っ越した妻は、そこで高級ブランドの服を売る店を開きながら 3 人の娘を育てた。祖父が亡くなると、長男の敏忠はその財産を受け継ぎ、家族 5 人でさらに豊かに暮らした。

休日には家族で高雄市内にある大統デパートへ買い物に行き、家にはテレビやファミコンもあったために、近所の子どもたちがよく遊びに来ていた。イタリアからベスパを取り寄せたこともある。夫婦は困っている人にお金を貸すこともあったが、返ってくることはほとんどなかった。

長女と次女が学費の高い私立学校に通っていたころ、敏忠の働いていた銀行の経営が悪化し、別の銀行と合併されて敏忠は失業してしまった。母も病気で亡くなったが、待望の男の子が生まれた。祖先に男の子が多かったために「後に生まれるのは女の子ばかりで、男の子はもう生まれません」と信じられていたので、この子はきっと母が仏さまに祈って授かったのだと思ったそうだ。

しかしその幸せは長く続かなかった。友人のすすめで始めた不動産の仕事が1年で失敗、貯金は一瞬でなくなってしまった。裕福だった生活は終わりを告げ、妻が開いた服屋も閉店した。敏忠は「騙されただけだよ」と語った。

その後、長女は台北の東呉大学に合格したが、次女は学費を抑えるために私立高校から公立高校へ転校した。三女が中学生のときには、教育ローンも考えなければならなかった。生活は苦しくなったが、敏忠は仕方がないと思いながら息子と高齢の父親の世話をした。面白かったのは、息子は中国語しか話せず、父は日本語と台湾語しか話せなかったので、会話はいつもちぐはぐだった。父は「孫が外省人の言葉しか話せない」と敏忠に不満を言い、息子は無邪気に「おじいちゃん言葉、全然わからない」と言った。

一方、妻は現実を受け入れられず、玉ねぎを売る小さな商人になっても見栄を張って人にお金を貸し続け、足りないとお寺からお金を借りることもあった。そのせいで借金取りが家にまで来るようになり、最終的に敏忠は恒春の家を売り払って、南湾へと引っ越した。

新しい地域ではご近所との関係も良く、敏忠は静かに暮らそうと思っていた。妻の行動には頭を悩ませたが、あきらめてもいた。ときには映画『海角七号』の影響から観光客で溢れかえった恒春や墾丁の様子を見ながら、落ちぶれた自分の今と比べてため息をつくこともあった。

やがて、次女が結婚し、翌年に孫娘（私）が生まれた。敏忠の息子と孫娘の年の差はわずか8歳で、孫娘が息子を「おじさん」と呼ぶのを敏忠は面白いと思った。ところが、次女が母の借金を返すために結婚祝いの金のアクセサリを売ってしまい、敏忠と妻の関係はさらに悪くなった。父が亡くなると、長女が家を民宿に改装しようと提案した。少しでも安定した収入を得ようとしたのだ。

しかし民宿の工事はうまくいかず、完成したころには当時人気だった「スプリングスクリーム」のイベントも終わっていた。近くの民宿の人たちは慰めるように「運が悪かったね」と言った。オープン当初も騒音や水漏れ、駐車場不足などのクレームが続き、順調とは言えなかった。それでも、2年目には少しずつ落ち着いてきた。民宿の前に植えた小さな木も病気で

枯れそうだったが、今では安定して育ち、2階の高さまで成長した。

月日が流れて息子は外で働くようになり、娘たちも全員結婚し、一番年上の孫娘ももうすぐ大学を卒業する。民宿の経営も順調だったが、墾丁の観光ブームがだんだん陰りを見せ、土地トラブルなどでご近所との関係が悪くなり、昔のようなんびりした生活はもう戻らなかった。妻は脳卒中で外出できなくなり、敏忠は息子や娘と一緒に介護をしている。ただし、借金に追われる日々はようやく終わり、裕福ではないけれどもお金に困ることもなく、穏やかに暮らしている。敏忠は、それも悪くないと思っている。

④過去は変えられず、ただそれを記録し、忘れずに歩み続けるしかない。

聞き手・書き手＝賀鈺煊

語り手＝賀才茂（尊漢の息子）

尊漢は1928年、中国湖南省に生まれ、父母と兄弟姉妹の5人（男2人、女3人）からなる大家族の中で育った。兄弟の中で上から4番目の次男である尊漢は、戦乱の時代にあって「卵を一つのカゴに盛るな」という教えに則って、家族それぞれが異なる道を歩むことにした。長男の兄はすでに家庭を築いていたために、物心ついたころに尊漢は家を出て、外の世界へと足を踏み出した。

1949年に中国共産党が国共内戦に勝利し、中華人民共和国を建国した。一方中国国民党は内戦で敗れ、台湾に撤退した。尊漢は中国国民党の党员で、当時21歳だった。戦火が絶えない混乱の時代、彼は友人の鄧に連れられて台湾へと渡った。

当初、尊漢は台湾で家族もおらず、住むところもなかったが、鄧の状況は全く違っていた。彼は少将で、幸い家族と共にいて住まいもあった。尊漢の境遇を知った彼は尊漢を自分の執事にした。様々な混乱を経て、尊漢は暫くして桃園の中壢に落ちつくことになった。友人の家で働きながら尊漢は別の仕事も探していたが、背が低かったこともあって、なかなか仕事が見つからなかった。就職先にも恵まれず、八方ふさがりの中で結局警察学校に進学して警察官となった。

1953年、警察官となった尊漢は嘉義県にある南靖糖廠に配属された。そこで妻の父と知り合い、その縁で後に妻と出会うことになる。2人は1960年に結婚、三女一子に恵まれた。嘉義に定住した尊漢は中国に残した家族のことを案じ、常に連絡を取り続けていた。当時は直接の通信は難しかったために、手紙は台湾から香港、さらにアメリカを経由して、ようやく湖南にいる家族のもとへ届いた。

1966 年、中国で文化大革命が始まった。台湾で生活している尊漢は、中国の家族にとって危険な存在となった。各地で殺戮や内乱が起こり、紅衛兵は「破四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打ち破れという政治スローガン）」を主張して家々を巡回し、書物や手紙、写真などを調べあげていったが、ついに手紙を発見された尊漢の父親は文化浄化の対象となって、吊し上げを受けることになった。過酷な糾弾や迫害を受けた結果、尊漢の父親は自殺した。

以来、尊漢は己を責め続けて、中国との連絡を絶ってしまった。時間が経ち、子供たちが成長したが、尊漢は変わらず警察官としての日々を過ごしていた。

1979 年 12 月 10 日、尊漢は「放課後はすぐに家に帰るんだ」と子供たちに言い残してそのまま仕事へと向かった。その日はいわゆる美麗島事件（民主化を求める市民と軍警が衝突した事件）が起こった日だった。当時、警察は大規模な民主化運動が起こることを把握していたが、それがいつどこで起こるかは分からなかった。尊漢は家族に気を付けろと注意するはかなかった。結局事件の中心地は高雄であったが、台湾各地でも小規模な衝突があった。はらはらする場面もあったが、尊漢は無事家に帰ってきた。

実際戦争を経験したことのある尊漢は、その恐ろしさを身をもって知っていた。文化大革命の一件以来、手紙のことが常に心に引っかかり、悔しさと家族への想いが交錯していた。1993 年、警察官を退職したことをきっかけに、尊漢は勇気を出して妻と一番下の娘を連れて、中国に残した家族を探す決心をした。

三八離家八三歸，鄉土改變不識土。

城中表弟勇帶路，不識鄉語問無門。

自己下車鄉語問，小童茫然找奶奶。

姊弟相見擁抱哭，村婦原是外甥媳。

民国 38（1949）年に家を離れ、民国 83（1993）年に故郷へ戻った。ところが故郷の景色は一変し、もはや記憶の中の土地ではなかった。町に住むいとこが親切に案内してくれたが、故郷の方言がわからず、いとも道を尋ねられずにいた。車を降りて方言で道を尋ねたところ相手の子どもは戸惑い、祖母のもとに駆け出した。姉弟は再会して涙を流しながら抱擁を交わした。村の女性は自分の甥の嫁であったのだ。

この詩は尊漢が賀知章の詩「回郷偶書」を改作したもので、原作の「回郷偶書」は唐代の賀知章が長く異郷に暮らす悲しみと久々に故郷へと戻った喜びを描いたものだ。残酷な戦争は尊漢の一生に影を差したが、過去は変えられず、ただそれを記録し、忘れずに歩み続けるしかない。晩年尊漢はこの詩を語るたびに故郷と家族を思い、その思念を静かに子孫たちへ伝えていった。

尊漢は民国 113（2024）年に亡くなった。96 年の人生で、悲しみも楽しみもあり、戦火と革命の時代を越えて今の大家族がある。今年、才茂（尊漢の息子）は妻と一緒に中国湖南へと帰った。「賀」の縁は、尊漢の手で今も静かに続いている。

⑤若いうちにいろいろな経験をしてほしい。

聞き手・書き手＝黄琪雅

語り手＝母親／高雄県旗山鎮農家娘／陽明小学校事務員／高雄市前鎮区在住

惠香は民国 58（1969）年に高雄県旗山鎮（現高雄市旗山区）で生まれた。家族は両親と 4 人姉妹で、惠香は三女にあたる。両親は果物商で 4 人の子どもを育てた。

旗山はかつてバナナの名産地として知られ、大量のバナナが日本へ輸出されていた。当時の旗山はとても裕福で、早くからバロック式の建築が立ち並び、きらびやかな繁華街は大都市にも劣らないほどだった。「旗山はバナナで栄えた町で、当時は『北は九份、南は旗山』とまで言われていたんだ。だけど、今は旗山がどれほど栄えていたか知る人は少なくなってきたよ」と惠香は言う。かつて旗山のバナナと言えば、九份で掘り出される金に並ぶほど有名だった。バナナ農家の作業着についたバナナの汁でさえ、豊かさの象徴とされていた。惠香の祖父母の代からバナナの栽培を始めたが、農業はあまりに過酷で、惠香が中学生のころに家族 6 人で高雄市内へ引っ越すことになった。

惠香にとって旗山の最も印象深い記憶は、祖母が作ってくれたバナナスープだ。物資が乏しかった時代、祖母は身近にある材料で青バナナを使った塩味のスープを作ってくれた。刻んだネギを少し加えただけの簡素な料理で、それが一食分だったのだ。この特別な料理は、惠香が大人になってからは見かけることがなくなったそうだ。

惠香の父親は高雄市の前鎮区に家を買った後、母親と果物商を始めた。その頃、惠香と姉妹たちは交代でお店を手伝い、とくに旧正月の前後の繁忙期には果物の販売も手伝っていた。「当時はすごく大変だと感じていたけれど、今振り返ってみると、その経験があったからこそ、のちに会計士という道に進むきっかけになったんだろうね」と惠香は言う。

惠香が子供のころは今のようになんて車が多くなく、路地は子供たちの遊び場だった。惠香は近所の子供たちと仲が良く、放課後はみんなで縄跳びにかくれんぼ、ビー玉遊びにケンケンパをしたりして遊んだ。何の心配もなかった午後の時間は、惠香のこころの中で一番純粋な幼少時代の思い出になって残っている。

今も昔も、商売をしている家庭では土地公（土地の神様）に商売繁盛を祈ってお参りをする。

子供のころの恵香はお参りの日がとても楽しみだった。というのも、普段は家でお菓子を買ってもらうことはなかったけれど、お参りの日だけはたくさんのお菓子を買ってお供えしていたからだ。恵香にとって、それは子供時代に一番楽しみにしていたことのひとつだった。

恵香が高校生のころはちょうど反抗期で、家にいるのがあまり好きではなかった。高校を卒業するとすぐに2番目の姉と一緒に台北へ行って、夜間学校に通いながら昼は仕事をした。台北で過ごした数年間は彼女の人生で最も忙しく、そして心を鍛えられた時期でもあった。

当時の台北は今ほど交通が発達しておらず、遠くに行くにはやっぱりバイクがあったほうが便利だった。恵香は姉と一緒にアルバイトで稼いだお金でバイクを買ったが、ある日授業終わりに外に出たらバイクがなくなっていて、地面にはヘルメットが二つ並んでいるだけだった。2人はそのヘルメットを抱えて、泣きながら警察署まで歩いて行って盗難届を出した。その出来事は今でも恵香にとって特別な思い出として残っている。

3年後、恵香は卒業して高雄に戻ったが、北部との給料差があまりにも大きいことに気づいた。そこで恵香は国家試験を受けることを決意し、塾に通って必死に勉強を始めた。公務員試験には無事合格することができたが、再び台北に配属されることになってしまった。数年間遠く離れた土地で働きながら安定した収入は得られたものの、恵香の心の中にはいつも高雄の家族と故郷への思いがあった。

2年後、恵香はついに高雄に異動することができた。そしてある同窓会で、小学校の同級生——私の父親と再会した。十数年ぶりの再会だったにもかかわらず、2人の関係は変わらず良好ですぐに結婚することを決めた。

現在、恵香は私の父親と3人の娘（私と2人の姉）と一緒に高雄で暮らしている。若い頃に台北で学校に通ったり1人で働いたり、常に新しいことに積極的に挑戦してきた恵香は、自分の子どもたちにも「若いうちにいろいろな経験をしてほしい」とよく語っている。

「快適な場所にとどまらず、たとえ失敗や挫折があったとしても、それはとても貴重な経験になるのよ」と恵香は言った。

⑥人生は確かに辛いことばかりだったけど、それでも幸せだったよ。

聞き手・書き手＝陳珮蓁

語り手＝祖母／屏東県高樹郷大埔村農家娘／農家妻／屏東県高樹郷菜寮村在住

劉秋金は民国32（1943）年、屏東県高樹郷の農家に生まれた。客家の家系である。劉家の家族構成は、父方の祖父母、父母、兄弟7人（男3人、女4人）で、劉秋金は兄弟の中で最年長

の長女であった。父母は農業を営んでいて、主に葉煙草と稲を栽培していた。

「昔は家が貧しかったから、小学校だけで勉強は終わり。卒業したら家の農業を手伝うようになった」と劉秋金は言う。劉秋金が育った高樹郷は古くから農業を基盤とする地域で、特に昭和14年（1939年）以降、葉煙草の生産が盛んになった。特に高樹郷は屏東県で最も多くの葉たばこを生産する地区として知られていた。祖母の出身地である大埔村を含む旧寮，菜寮など北高樹一帯は、葉たばこの主な生産地であった。

「昔はみんな葉たばこを栽培していた。ほかの作物よりお金になったから、どこの家でもやってたんだ」と劉秋金は言う。葉たばこは契約栽培であり、政府の専売品に分類されていた。台湾菸酒会社が種子を農家に配布し、育苗から定植、収穫、乾燥まで一貫して行われていた。しかし、その過程は多くの人手が必要だったために、地域の農家同士が助け合う「交工文化」が生まれた。ある農家が収穫期に入ると、他の農家が手伝いに来て、次はそのお返しとして自分も他の農家を手伝うという相互扶助の精神が根付いていたのだ。「1人じゃとても全部できないから近所の人が手伝いに来てくれて、私たちもまた手伝いに行ったんだ」と劉秋金は言う。

葉たばこの栽培は稲作の合間に行われる。毎年10月から翌年4月頃までが収穫期で、農家は「二期作の稲、一期作のたばこ」という輪作方式で農業を営んでいた。葉たばこの季節がひと段落すると、農家はすぐに稲作に取りかかる。例えば、稲の苗を植えたあとには「搓草」という作業がある。これは雑草の種が広がらないように、稲の苗を傷つけずに草を土に押し込む作業である。「あれは本当に大変だったよ。ずっと田んぼで腰をかがめてやらないといけないから」。劉秋金は言った。雑草は肥料代わりにもなるために、農家にとっては大切な作業だったという。

劉秋金は小学校を卒業したあとすぐに家の農作業を手伝うようになったが、通学時の思い出は今でもよく覚えている。「道なんて今みたいに広くなかった。田んぼのあぜ道をずっと歩いて通ったんだ」。当時の暮らしも質素で、自給自足の生活が成り立っていた。「小さいころは自分たちで育てたサツマイモが主食で、わずかな米と一緒に炊いて食べてたんだ。おかずは野菜と塩魚だった」劉秋金は言った。農薬も普及していなかったために、稲の育ちもあまり良くなかったらしい。家にサツマイモがないときは、自転車で30分ほどかかる泰山まで行った。そこで拾ってきたサツマイモは自分たちの食事にするだけでなく、豚の餌にも使われたという。帰宅後は炊事や洗濯も行った。洗濯は家ではなく、近くの水路に行って洗濯をしていた、風呂や料理に使う水もそこから汲んでいた。「昔の水路は今よりもずっときれいだったよ」と劉秋金は笑いながら言った。

劉秋金の母は「媒人」、つまり結婚の仲介人をしていた。劉秋金自身も20歳のときに紹介を通じて結婚し、私の祖父と結ばれた。その後も葉たばこや水稻などの農業を続け、5人の子ども（娘3人、息子2人）に恵まれた。そのうち1組は双子で、1人は隣の家で養子として出され

た。劉秋金の義父（夫の父）が「女の子はどうせ将来嫁に出すのだから」と、双子の1人を他の家で育ててもらうことを決めたという。遠くへ送られたわけではなかったが、劉秋金はそのことを思い出すたびに心を痛めてきた。その子どもも成長するにつれて、「どうして自分だけが他人に育てられたのか」と劉秋金に対して不満を口にするようになり、「お母さん」と呼ぶこともなかった。しかし大人になるにつれて少しずつ心のわだかまりが解けていった。そして、今では正月や親族の集まりなどの際に、劉秋金を訪ねるようになった。「私はあのときどうすることもできなかった。ただ申し訳ない気持ちはずっとある」と劉秋金は語った。

「私と夫は本当に多くの苦勞をしてきた。農業はとても大変な仕事で、毎日炎天下で働かなければならない。台風が来ると、農作物への被害が本当に大きかった」と劉秋金は言う。それでも子どもたちが無事に成長して、娘たちが良い家庭に嫁いでいったのを見て、彼女はとても喜びを感じている。「人生は確かに辛いことばかりだったけど、子どもたちはみんな親孝行で、彼らのおかげで香港や中国、日本と多くの場所に旅行へ行くことができた。それが本当に幸せだったよ」。

現在、劉秋金は転倒した影響で車椅子生活を送っている。農業の仕事もできなくなってしまった。それでも夫は今でも毎日働きに出かけている。以前は葉たばこを育てていたが、現在ではナツメを栽培している。劉秋金をよくこう言う。「あなたのおじいちゃんは本当に一刻も休むことなく、毎日働きに出かけているんだよ」。そして最後に、劉秋金はこう言った。「あなたたちはちゃんと勉強して、私たちみたいに炎天下で苦勞せずに、エアコンのある快適な職場で働けるようになりなさい」。

⑦「ちゃんと勉強しなきゃいけない！」

聞き手・書き手＝林映彤（2025 年度）

語り手＝祖母 高雄県鳳山市の元肉屋／高雄市仁武区在住

蕙英は民国 40（1951）年に高雄県鳳山市（現在の高雄市鳳山区）で生まれた。家族は父母と四人の兄弟（兄 2 人、姉と蕙英）で構成されていた。蕙英は兄弟の末っ子で、勉強が最も得意だった。父は氷工場で働き、大きな氷を作って配送する仕事をしていた。母は何でも屋のような仕事をしており、服を作ったり漬物を作ったりしていたが、主に量販店で米を売ったりしていた。

蕙英は末っ子で、兄弟の中で最も頭が良かったことから父母に一番愛されていた。そのため、20 歳になっても自分で靴下を洗うこともなかった。また、母は平日に出かける前に兄弟にお小遣いを渡していた。朝、学校に行く前に 2 元もらい、昼に家へ帰るときにも 2 元もらえ

た。もしも朝にお小遣いをもらえなかった場合は、昼に5元もらうことができた。最初、この特別なルールは母から蕙英だけに伝えられた。そのため、昼にお小遣いをもらうことを選んだ蕙英は、他の兄弟よりも多くのお小遣いを手にすることができたらしい。

小学生の時、先生に勧められて選抜クラスに入った蕙英だったが、数学が苦手だったようにうまくいかなかった。特に数学の授業では、先生が何を言っているのか全く理解できず、頭が真っ白になってしまった。数学のテストでは点数が低く、いつも叱られたり叩かれたりしていた。それでも先生は蕙英が進学することを願っていた。

「私の字が綺麗で、勉強が少しでもできるだけで進学しろだって？ まったくふざけた話だよ！」もともと勉強が好きではなかった蕙英は先生の期待を無視し、小学校を卒業するとすぐに働くことを決めた。

当時は「身長が150 cm未満の者は雇用しない」という規定があったが、健康診断で身長が足りずに不合格となった蕙英は、負けず嫌いの性格からどうにかして解決しようとした。

「ママ、お金ちょうだい！ パーマをかけたなら身長が伸びるかもしれない！」

翌日、パーマをかけた蕙英は再度健康診断を受けた。その結果、身長が2 cmだけ伸びて見事合格を果たした。

こうして、初めての仕事が始まった。台湾パイナップル株式会社の最も有名な商品はパイナップルの缶詰だった。製造工程はまずパイナップルの原料を準備し、表面についた泥や汚れを水でしっかり洗い流すことから始まった。機械がほとんどなかった時代には専用の皮むき器を使って一つ一つ手作業で皮をむき、芯抜き器で芯を取り除いていた。その後輪切りにして形を整え、水と砂糖を混ぜて加熱し、シロップを作った。最後に缶に詰めて密封して商品として仕上げた。

加工工場は蒸し暑く、パイナップルの甘い香りが漂う小さな工場だった。蕙英は毎日このような環境の中で一生懸命働いた。十五歳になると、管理の仕事も任されるようになった。パイナップルの缶詰を作るだけでなく、製造の進捗も監督していた。

経済的に恵まれなかった蕙英は、給料をもらうとその多くを家族を養うために母に手渡していた。残ったお金も将来のための貯蓄として使い道が決められ、勝手に使うことは許されなかった。しかしどれだけしっかりした性格でも、誘惑に負けてしまい母に叱られることもあった。

いつものように迎えた給料日、蕙英はたった1日で残りの給料をすべて使い切ってしまったのだ。映画を見たり、美味しい料理を食べたりするだけでなく、友達にも奢ってあげた。家に帰ると母にこっぴどく叱られたが、蕙英にとってはそれもまた楽しい思い出となった。

一生懸命働いていても、毎日のように工場長に叱られた。工場長はマイクを使って大声で怒鳴るために、その声は町中に響き渡っていた。ある日、近所に住んでいたおばあさんがその叱

責を聞いていたことを知り、蕙英は恥ずかしくなった。翌日、工場長と激しく口論し、そのままパイナップル缶詰工場の仕事を辞めてしまった。

そして高雄の前鎮にある輸出加工区で働き始めたが、数日が経った頃、以前のパイナップル缶詰工場の工場長が前鎮の工場を訪れて蕙英に謝罪した。そして、「ぜひ缶詰工場に戻って働いてほしい。今度こそちゃんと面倒を見る」と約束した。確かに家から前鎮の工場は遠く、不便に感じていた蕙英は工場長を許して再びパイナップルの缶詰工場で働くことを決めた。そして、結婚するまでその工場で働き続けた。娘たちを養うためにもっとお金を稼ごうと、蕙英は肉屋でも働くようになった。

結婚後、蕙英は2人の娘を次々に出産した。長女は活発な性格で、時々人と喧嘩することもあった。次女は温厚で寡黙な性格で、特に野球の試合をラジオで聴くのが好きだった。次女が10歳のときに、夫が病気で亡くなった。そのため、家庭教育は基本的に蕙英が担うことになった。蕙英は勉強が得意な娘を愛した。その影響もあって、2人の娘はどちらも勉強がとても得意だった。テストで点数が低かった場合、1点でも減点されていると容赦なく叩かれた。長女はよくミスをしたために叩かれたが、次女は一度も叩かれたことがなかった。蕙英はいつも専用のベルトを使って姉妹を叩いていた。長女には白いベルト、次女には茶色のベルトだった。

ある日、蕙英が満点を取れなかった次女を叩こうとしたとき、次女は緊張と恐怖のあまりに白いベルトを持ってきてしまった。それを見た長女は「なんで白いベルトを持ってるの？ それって私のなんだけど！」と叫んだ。本気で怒っていた蕙英だったが、その様子を見て思わず笑ってしまい、叩くことなどすっかり忘れてしまったそうだ。

姉妹は初めての大学入学共通テストで思ったよりも良い点が取れなかったが、蕙英はそれぞれに10万元ずつ学費を払い、大学受験予備校に通わせてもう一度しっかり勉強させた。2人は2回目の試験で無事良い成績を収めて、見事国立大学へ進学した。卒業後はどちらも蕙英の念願だった「先生」という職業に就いた。

次女が孫（私）を出産したとき、蕙英は肉屋の仕事を辞めて、全身全霊で育児に専念した。家庭での教育は以前と同じように厳しかったが、満点にこだわることはなくなった。それでも、孫には常に良い成績を維持するように求めている。

「夫には早くに先立たれて、子育ては本当に大変だった。それでも、2人の娘はとても行儀がよく優秀で、そろって理想的な職業に就いてくれた。今は大きな達成感に誇りや幸せを感じているよ。」—— 蕙英は、やさしく微笑みながらそう語った。

⑧母ちゃんは、「あんたのお父ちゃんがそこにいるよ。きっと私を連れに来たんだ」って言ったけど、私には誰の姿も見えなかった。

聞き手・書き手＝侯宜涵

語り手＝祖母／台南市四鯤鯓出身／塗装工妻／台南市南区在住

錦秀は民国 44（1955）年に台南市に生まれ、九歳になるまでは四鯤鯓に住んでいた。錦秀は両親と 5 人兄弟の 7 人家族で次女だった。母は猪血湯（豚の血を固めたスープ）を売って生計を立て、父は豚の解体業をしていた。「お父さんに関してはあんまり印象に残ってないよ。ほとんど喋っていないから。でもすごく厳しい人だけは覚えているかな」と錦秀は言った。

四鯤鯓は現在の台南市南区鯤鯓里のことで、黄金海岸沿いにある小さな漁村だ。龍山寺は四鯤鯓に住んでいる人々にとって最も重要な信仰で、錦秀も含めて多くの人が龍山寺の周囲に住んでいた。当地には四鯤鯓龍山寺の清水祖師と塩埕北極殿が法力で争った伝承が残っている。清水祖師の指示で四鯤鯓には塩埕に向けて巨大な鶏の像が建てられて、人々は「塩埕の米を食い尽くしてやる」と言った。それに対して塩埕の玄天上帝は虎の像（虎爺）を建てて、その鶏を食べようとした。四鯤鯓では実際に虎の咆哮が聞こえたとも言われているようだ。以来、塩埕と四鯤鯓の間には「婚姻は結ばれず、両地の者が結ばれれば必ず不幸が訪れる」という暗黙のルールが生まれた。今では両地の若い人はあんまり気にしていないが、錦秀は今でもよく子供や孫たちに「塩埕にある北極殿へ行っちゃたダメだよ」と言っている。

九歳の時、錦秀の両親は病気で相次いで亡くなってしまった。母の最期の時、錦秀はずっとそばにいた。「母ちゃんは、『あんたのお父ちゃんがそこにいるよ。きっと私を連れにきたんだ』って言ったけど、私には誰の姿も見えなかった。そのあと、母ちゃんはもうすぐ自分に死が訪れるを感じたのか、私に向かって『おばあちゃんを呼んできて。髪をとかしてほしい』と頼んだんだ」。それから、錦秀の祖母が母の髪をとかして結び直し、着替えさせてあげた後に錦秀の母は亡くなった。

両親が他界した後、頼れるのは祖母だけだった。ところが、年を取った祖母には 5 人の子供の面倒がどうしてもできなかった。養護施設に送ることにしたが、台南にあった養護施設は倒産してしまっていたから、錦秀と兄弟たちは省立台中養護施設（現在の衛生福利部中区児童之家）に入れられることになった。

養護施設での生活は想像ほど苦しくなかった。野菜やお肉だけでなく、毎日果物もいっぱい食べられた。しかしそこの生活がどんなに豊かでも、実家での生活には勝てない。夏休みや冬休みの時は帰省できたのだが、帰省前にはいつもは朝早く起きてわくわくしていた。ところが、休みが終わったら養護施設に帰らなければならない。帰りのバスを待っている時には毎回

祖母に抱きついてわんわん泣いた。「そんな私たちを見たばあちゃんも泣いちゃった。でもどうしようもないし、養護施設に送り帰すしかなかったんだよ」

台中の養護施設に入ると同時に、元々通っていた台南市龍岡小学校から台中の忠孝小学校に転入した。養護施設の子どもたちは、学校では多少なりとも差別を受ける。人数の多かった彼女たちは「十姉妹」（鳥の一種）と呼ばれていたが、錦秀もそう呼ばれたことがあった。「ある日耐えられなくなって、クラスの男の子を叩いたんだ。結局ふたりとも先生に叱られて、罰として教室の机の上に立たされた。その子も廊下に立たされたよ」と錦秀は言った。

小学校を卒業した錦秀は、進学せずに台南に帰ってきた。下にはまだ2人の妹と1人の弟がいた。妹2人はそれぞれ高雄とアメリカの家に養子として引き取られた。弟を世話できるように、四鯤鯓近くにある塩埕の紡績工場で働き始めた。そこで7、8年働いてから、地元の人の紹介で同じ四鯤鯓出身の林炆栖（私の祖父）と結婚した。結婚してからすぐに1人目の娘が生まれ、2人目の息子、3人目の娘も続々と生まれた。子育てのために紡績工場での仕事を辞めて牡蠣の殻むきをしたり、夫の塗装の仕事を手伝ったりしながら暮らした。

結婚してから、錦秀一家は夫の兄と一緒に四鯤鯓にある三合院に住んでいたが、半分は別の家族が住んでいたから、彼らはその三合院の半分、2部屋しか使えなかった。長女と次女は夜になるといつも隣人の空き部屋で寝させてもらっていた。長女が就職して会計士となった後、頭金を貯めて新しい家を購入した。そこで、錦秀一家は四鯤鯓から安平五期（台南市第五期市地重画区）まで引っ越した。それから錦秀の子供たちは次々と結婚して子供を産んだ。安平に引っ越して6、7年経ったころ、近くで孫の面倒を見るために長女一家が住んでいる南区のアパートへと引っ越した。

4番目と5番目の孫が小学校4年生のころ、錦秀はずっと続けてきた牡蠣の殻むきの仕事を辞めた。代わりに家の近くにある土魷魚羹（サワラのフライにとろみのあるスープをかけた料理）のお店でアルバイトを始めた。孫たちが大学に入って就職すると、20歳で子どもを産んでからずっと子育てをしてきた錦秀もようやく一息つけるようになった。

今年71歳になった錦秀は、夫と長男、そしてその息子たちと一緒にアパートで暮らし、2匹の犬と1匹の猫に囲まれている。毎日仕事が終わった後、スマホをいじりながらのんびりと、「今日の晩ご飯は何にしようか？」とみんなに聞いてくる。

⑨見習いの立場ってのはな、ほんとうに弱いもんだったよ。飯と寝床はあっても、給料なんてほとんどなかった。

聞き手・書き手＝黄馥溪

語り手＝黄国新／バス運転手／台湾嘉義市在住

黄国新は民国 35（1946）年、台湾の嘉義に生まれた。5 人兄妹の長男で、2 人の弟と 2 人の妹がいる。父は黄海明、母は黄劉回、祖父は黄萬示という人物であった。黄家はもともと福建の閩南地方にルーツを持ち、4 兄弟で台湾へ渡ってきたという。家があまりに貧しく、分ける物も木の椀 1 つしかなかったという話は、親族の中でも語り継がれてきた逸話である。祖父の黄萬示は、日本統治時代の東石郷副瀨村にて保正（村長）を務めていたという。当時の警察官で、後に「義愛公」として神格化された森川清治郎とも接点があったらしい。

黄国新の父・黄海明は長男であったが、病弱で家業を継ぐことができなかった。十分な教育も受けられず、性格もおとなしかったために、代わりに弟が家を仕切るようになった。その結果、家族が所有していた資産——映画館 2 軒、精米工場 2 つ、果物店、雑貨店、農地、養殖地など——はすべて失われてしまった。

黄国新は「新しい国に生きる者」として「国新」と名付けられ、長曾孫として期待されて育った。小学校を卒業する前に台北へ出て、大型バスの車体工場で徒弟として働き始めた。七張、大坪林のあたりで、毎日三重から自転車を漕いで通っていたという。雨の日もカップなど買わず、濡れてでも行くのが当たり前だった。

「見習いの立場ってのはな、ほんとうに弱いもんだったよ。飯と寝床はあっても、給料なんてほとんどなかった。」

そう語る黄国新は、当時の厳しい徒弟制度を振り返った。あるときより腕の良い師匠のもとへ移ろうとしたことで、元の師匠から平手打ちを受けたこともあったという。それでも技術を学ぶためにはそのような試練も耐えなければならなかった。

兵役では澎湖諸島に配属され、連隊では車両整備を担当した。整備技術は高く、他の部隊の将校からも「高保場（高等保養場）に行ける」と評価されたが、直属の中隊長に気に入られていたため、連隊内に留められた。中隊長は彼の顔に傷がついた際には士官長を皆の前で叱責するほど、黄国新を大事にしていたという。

軍隊生活で福利社（購買部）の女性が彼に好意を寄せ、母親を通して「娘と結婚してくれたら店も家も譲るから」と結婚を申し出たこともあったらしい。この話は本人の中でも特に印象深かったようで今でも嬉しそうに語る。

除隊後、実家の財産はすでにほとんど失われていた。結婚相手はいことの紹介で知り合った

新結庄の女性で、漁村で育った彼女の父は養殖業を営んでいた。当時は台風のために海水が押し寄せ、暮らしは常に自然災害と隣り合わせでもあった。結婚後、黄国新は台南の麻豆で鉋金修理工場を開き、その後嘉義に引っ越してから整備業を続けた。

深夜に嘉義への引っ越しを執行した際には、弟たちと息子たちはトラックの荷台に積まれた家具の間で眠っていた。寒空の下、鍋の蓋が飛んでいき、弟が走って取りに行ったエピソードも家族の中では笑い話として残っている。

嘉義で「國恩保養廠」を開業した頃、たまたま蔣経国の車列が通りかかって、保養廠の名前の由来について尋ねられたこともあった。黄国新は自身の名前の「國」と長男の「恩」から取ったことを説明したという。蔣経国から「何か支援は必要か？」と問われたが、「いえ、特にありません」と断った。このときに借金をしていれば、南部の整備業界で大きな影響力を持てたかもしれない——と息子は後に語った。

その後、健康上の理由で保養廠をたたみ、民国 82（1993）年からバス運転手として再就職した。最初の配属地が僻地の梅山郷であったことに不満を持ち、一度は辞職したものの、再度試験を受けて復職した。当時のバスは運転手の自宅で駐車することもあり、ある晩帰宅途中で飲酒運転の車に追突された。

「バックしてたんだよ。そしたら、いきなりガンッとぶつけられてな。向こうは酔っぱらいで、こっちはただのとぼっちさ」。

そう語る彼は、酒気帯び運転の危険性を何度も繰り返し語った。相手の過失であっても損害賠償の一部を支払わなければならない、納得いかない気持ちが今でも残っているようだった。

もうひとつ大きな事故があった。雨の降る晩、対向車線から逆走してきたバイクがぶつかってきたのである。相手はヘルメットをしておらず、頭からバスに激突して植物状態になった。黄国新は過失ゼロとされたが、結果として3割の賠償金、約 30 万円を支払うことになった。彼にとっても、家族にとっても大きな出費であった。

「大過はないけど、小さなトラブルは尽きなかった」と彼は笑いながら語ったが、その笑顔の奥には長年の苦勞がにじんでいた。

民国 95（2006）年、安全運転のまま無事に定年を迎えて引退した。現在は嘉義で静かに暮らしている。孫が話しかけると、昔のことを思い出しながら時には得意げに、時には懐かしそうに語ってくれる。

黄国新の語る生活史は個人の人生であると同時に、戦後台湾の変遷を映し出す一つの鏡である。時代に翻弄されながらも自らの手で生き方を切り拓いてきたその歩みは、聞き手に多くの示唆を与えてくれるものだった。

⑩任勞任怨（苦勞をいとわず）

聞き手・書き手＝何宜娣

語り手＝祖母／旧台北県八仙里農家娘／台北市北投区在住

月娥は民国 38（1949）年に旧台北県八仙里承德路に生まれた。当時の台湾は農業から工業化へと移行する時代で、彼女の家族もその変化の中にあった。家族は父母、4 人の兄、3 人の妹を含む大家族で、もともと農業を営んでいた。

幼少期の月娥は田んぼで農作業を手伝いながら育った。しかし、彼女が 10 歳の頃、父親が鴨の飼育へと転業し、鴨の卵を売って生計を立てようとした。ところが、ある年の台風で大洪水が発生し、飼っていた鴨が流されてしまった。この出来事を機に家族は再び農作業に戻り、野菜を育てて販売することになった。

月娥の学歴は小学校卒業までで、その後すぐに紡織工場で女工として働き始めた。この仕事は 10 年ほど続き、工場ではさまざまな作業を担当した。織機の操作や布地の検査、仕上げ作業などを経験し、同僚たちと助け合いながら働いたという。仕事は単調で厳しいものだったが、家計を支えるために懸命に働いた。

その後、彼女は電子工場に転職し、電子部品の組み立てやはんだ付けなどの作業に従事した。工場では精密な作業が求められ、集中力と忍耐力が必要だったが、手先の器用さを活かし、確実に仕事をこなしていた。工場では若い女性労働者が多く、休憩時には仲間とおしゃべりをするのが唯一の楽しみだったという。

結婚はお見合いによるもので、夫とは家族の紹介で出会った。結婚後、第 1 子を出産すると同時に電子工場を辞め、育児に専念した。3 人の娘と 1 人の息子を育て、特に末っ子が 4 歳になるまでは専業主婦として子育てに励んだ。その間の家計は、陶磁器会社で働く夫が支えた。育児の日々は忙しく、朝早くから子どもたちの世話をし、家事をこなしながら過ごした。子どもたちの教育には特に力を入れ、学業を大切にしよう常に励ましていた。限られた収入の中で子どもたちの学用品を揃え、学校行事にも積極的に参加した。

子どもたちが成長すると、月娥は再び職場に復帰することを決意する。彼女が選んだのは、台湾で 2 番目に開店した西門町のマクドナルド（昆明店）での仕事だった。最初はメンテナーとして店内の機械メンテナンスを担当し、飲料機やミルクシェイクマシンや製氷機やグリルなどの管理を行った。厨房業務を習得してからは、調理スタッフとしても働くようになった。

当時のマクドナルドは注文を受けてから作るのではなく、一定量をあらかじめ調理しておくスタイルだった。そのため、「品管（品質管理）」という職種があり、顧客の流れを観察しながら適切な量を調整する役割もあった。月娥はこれらの業務すべてを経験したが、仕事量が増え

でも給与は特に変わらなかった。彼女自身はこれについて「任勞任怨（苦勞をいわず）」とだけ語った。

マクドナルドでの仕事は単調な作業の繰り返しであったが、清潔な環境で働けることや新しい友人との交流できることが楽しみだったという。若いスタッフと一緒に働くことで時代の流れを感じることもできた。時にはクレーム対応を任されることもあり、忙しい時間帯には緊張感のある職場だったが、それでも「仕事があるだけありがたい」と考えて毎日頑張った。

仕事を続ける中で、月娥は多くの人生経験を積んだ。若い頃は家族のために働き続けることが当然だと思っていたが、晩年になって振り返ると、その経験が彼女の強さと忍耐力を育ててきたと実感している。特にマクドナルドでの仕事を通じて、異なる世代の人々との関わりを持ち、社会の変化を肌で感じることは貴重な体験だった。

65 歳になる前にマクドナルドでの仕事を終え、正式に退職した。現在は台北市北投区で静かな日々を送っている。彼女の子どもたちは 3 人の娘がすでに結婚し、孫も生まれ、それぞれの道を歩んでいる。このことが、月娥にとって最も大きな喜びとなっている。

彼女は「人生には多くの苦勞があるが、努力を惜しまずに、誠実に生きることが大切だ」と語る。そして、若い世代に向けて「どんな仕事であっても真面目に取り組めば、必ず何かを得ることができる」と語った。

月娥の人生は決して楽ではなかったが、決して諦めることなく、家族のために懸命に生きてきた。今彼女が心から願うのは、孫たちが健康で幸せに成長し、自分の夢を叶えることだという。そしてその夢を実現するために、自分の経験を少しでも伝えていきたいと考えている。

⑪ つらい時こそ、天主に祈って、助けを求めなさい。

聞き手・書き手＝王嘉穎

語り手＝祖母 高雄市前金区出身／敬虔なキリスト教徒／台北市在住

陳金鳳は民国 28（1939）年、高雄市前金区で生まれた。金鳳の父母、弟 3 人を含む 6 人家族で、金鳳は長女として幼い頃から弟たちの世話をしていた。家庭の経済状況は豊かではなく、両親は生計を支えるために忙しく働いていたために金鳳は自然と家事を手伝うようになった。

約 80 年前の高雄では街の周りにまだ田畑が広がり、牛車が通る光景も珍しくなかった。当時の生活は素朴で、電化製品もほとんどないから、近所同士のつながりも深かった。大人たちが農業や労働に追われる一方で、同じ通りに住む 20 人以上の子供たちはいつも一緒にかくれんぼをして遊んでいた。遊び疲れると、当時流れていた日本映画を観ることもあった。金鳳も

またそんな日々を過ごしていた。

「その時はねえ、ほぼ毎週末、家の近くにあるローズ教会（高雄市苓雅区にある玫瑰聖母聖殿主教座堂）に行って、シスターから聖書話を聞いていたの。あ、英語の授業も受けたことがあるんだよ！」金鳳は笑いながら振り返った。金鳳の祖母の代からカトリックを信仰していたために、金鳳も子供の頃から家族と一緒に教会のイベントに参加するのが日常だった。この教会との縁は今も続き、金鳳は現在でも毎週末早起きして教会に通っている。

学校での生活も、金鳳にとって忘れがたい思い出が多い。金鳳は10歳から苓洲小学校に通い、親友の阿見と一緒に裸足で学校へ通っていた。歩くのが面倒になると地面に落ちている使い古されたバスの切符を拾い、家で糊を使って新しく見せかけてこっそり利用した。また、牛車に乗って登校したこともあるという。金鳳はこのように、日々ちょっとした工夫を凝らしながら過ごしていた。そして勉強よりも運動が好きで、特に体育の授業を楽しみにしていた。徒競走ではいつも1位を取り、木登りも得意だった。

1年生から3年生の頃は午前中だけで授業が終わったために、お昼には家に帰って母を手伝い、洗濯に物干し、弟たちの世話をしたり、井戸水を汲みに行ったりしていた。「一度に8桶も運んだことがあるよ！」と金鳳は誇らしげに語った。家の手伝いに追われる日々だったが、学校が休みの日には家族で過ごす時間も大切にしていた。父が家族を連れて、当時最も賑わっていた愛河の畔や塩埕区を散歩したり、買い物に出かけたりしたが、これらは金鳳の幼いころの楽しい思い出となっている。

そんな金鳳には幼いころから美容師になるという夢があった。「でもねえ、自分の髪をきれいにできないことに気づいて、結局仕立て屋になったんだ」と金鳳は笑う。

17歳の時に自分で裁縫を学び始め、その後師匠について7か月以上技術を学んだ。習得後は近くの市場で小さな仕立て屋を開いた。器用な手先を持つ金鳳の店は人気を集めて、4年間で多くの服を仕立てた。大人用や子供用に加えて、外国人向けの服も手がけた。当時仕立て代は1着あたりわずか数十元程度で、一番高くても百数十元ほどだった。「家族の服はほとんど私が作っていたんだよ。『かえちゃん』（私）のお母さんの服もお婆さんの服も、おじいちゃん、『ふみお』の服もね！」と金鳳は語る。

そんな金鳳もやがて人生の新たな転機を迎える。金鳳の母親と文雄（金鳳の夫）の父親は昔からの知り合いだったのだが、金鳳が22歳の頃に両家の紹介で文雄と結婚したのだ。結婚後、文雄は台塑（台湾プラスチックグループ）に勤務し、夫婦で力を合わせて4人（男1人、女3人）の子供を育て上げた。

「その頃はお金もあんまりなくてけっこう大変だったけど、子どもたちはみんなまじめに勉強してくれたし、いい子ばかりでほんと助かったよ」。金鳳は当時を笑顔で振り返った。

金鳳が忘れられない出来事のひとつが、1977年のテルマ台風（台風4号）である。その日の

朝、仕事に出かけたときはいい天気だったのに、午後になると空は暗くなり、風と雨が激しさを増した。普段なら往復 30 分で帰れる道のりが、その日は 4 時間もかかった。倒れた木や電柱が道を塞ぎ、家で待つ子供たちを思って金鳳は焦りを募らせた。

「家にたどり着いたら、かえちゃんのお母さんとおばさんたちが机の上に乗って泣き叫んでいて、本当にびっくりしたよ！」と金鳳は当時を振り返る。その台風のせいで階段の 2 段目まで浸水し、数日間に及ぶ断水と停電が続いた。後にニュースで、高雄市全体がこの台風で深刻な被害を受けたことを知ったという。

「つらい時こそ、天主に祈って、助けを求めなさい」。金鳳はその言葉を今も心の中で信じ続けている。過去を振り返る金鳳の心にはさまざまな思いがこみ上げてくる。幼いころ家計は苦しく、常に厳しい生活だったが、金鳳はほとんど文句も言わず、困難を挑戦と捉え、その瞬間、瞬間に全力を尽くしてきた。

現在は息子と台北市のアパートで暮らし、毎日運動を欠かさず、健康的で充実した日々を送っている。子どもたちや孫たちは皆親孝行で、20 人を超える大家族も平和で幸せに過ごしていることが、金鳳にとって何よりの喜びである。

「天主のおかげだよ！」金鳳は心から感謝の言葉を口にした。

跋・台湾で書いてみた生活史

菊地 暁

臆面もなく編者に名を連ねているものの、本稿に対する私の関与はいたって少ない。本稿の 9 割 9 分 9 厘が、台湾高雄の文藻外語大学で日本語を教える倉本知明さんとその受講生の皆様の成果であることは、本稿序文に示されている通りだ。では私が何をしたのかといえば、ごくわずかな編集作業を除くと、カッコ良く言って「メソッド提供」、平たく言って「そそのかした」ということになる。学生さんに祖父母の聞き書きをさせたら面白いよ、ということをお伝えさせていただいたのだ。

私は、担当授業の期末レポート課題として祖父母への聞き書きを課し、その優秀作品を『ライフヒストリーレポート選』[菊地暁編、京都大学民俗学研究会、2014～現在]として刊行するなど、生活史を折に触れて実践し、その魅力と効用を説いてきた。これまで生活史を書かせた人数は 6000 人あまり。「書かせた人数」では、たぶん誰にも負けない。その成果を選びすぐった拙編著『書いてみた生活史 学生とつくる民俗学』[実生社 2024]にも、生活史を「みんな、もっと、書いたり書かせたりすれば良いのだ」とブチ上げたところだ。なので、今回、このような形で新たな実践をご提示いただけたことは、願ったり叶ったり。倉本さんとその受

講生の皆様に、あらためて感謝したい。

じつは、拙編『ライフヒストリーレポート選』にも、台湾出身者の作品は少なくない。だが、本稿と見比べると、いろいろと発見があった。拙編で取り上げていたのは「引揚者」と「本島人」の生活史であり、「外省人」の体験が後景化されていたことを、④賀鈺嬪によって認識させられた。田舎を離れて都会の労働者となった方々のライフコースが、高度成長期日本の出郷者たちと平行であることも興味深かった。そして、そもそも台湾ではライフヒストリーを「生命史」と呼ぶことも、倉本さんの序文から学ばせていただいた。感謝である。我が身の不勉強を恥じる。

ともあれ、課題は尽きない。無数の人生の無数の声。それをどのように集め、残し、世の中に開いていけば良いのだろうか。ヘイトとフェイクが渦巻き、生成 AI が圧倒的な質量と速度で「生の言葉」を侵食しつつある現在、肉声に耳を傾けるという営みを、どこで、どうやって確保していけるのだろうか。見当がつかない。できそうなことから、やってみるほかないのだろう。そんな無謀な投企に、また誰かがそそのかされてくれることを祈りつつ、本稿を届けたい。